



十一 指名Ⅲ

ここはクレッセントホテルの一室。部屋の照明は消されて暗闇だった。目を凝らしても、相手の姿はぼんやりとしか見えない。多分、相手の服装は黒色なのだろう。輪郭さえもおぼつかない。美里は、今日の服装は自分の好きな黒色で統一している。相手が、好きな服装で来てくれていいとの指名だったからだ。だから、この暗闇の中では、相手もこちらの姿はわかりづらいだろう。

「電気は点けないのですか。こんなに暗いと仕事ができないんですけど」

美里は不安に押しつぶされそうになりながらも、唾を飲み込み、意を決したように口を開いた。

「大丈夫、今日は、いつものような仕事はしなくてもいいですよ。あなたには他の仕事をお願いしたいんです。もちろん、別料金は支払いますから、安心してください」

薄っすらとだが相手の輪郭がわかり始めた。目が慣れてきたのだ。だが、そのぼやけた姿とは裏腹に、声はしっかりとした自己主張をしていた。

「支配人は、このことを知っているのですか」

美里はできる限り目を凝らして、相手の姿を掴もうとするものの、紗がかかっているのか、霧が立ち込めているのか、はっきりとした姿は分かりづらい。いや、わかりづらくしているのだろう。

「もちろん、知っています。あなたを推薦してくれたのも、支配人ですから。」

推薦？ 支配人があたしを推薦？ これまで、支配人があたしを推薦してくれたことはなかった。他のハートケア士が苦手な客は、これまでちひろさんが対応してきた。そのお鉢があたしに巡ってきたということなのか。それはなぜ？

美里は頭を巡らす。この店はごく普通のハートケアの店だ。いかがわしい店ではない。人の体をマッサージするように、人の心を癒すだけだ。他の店でもやり方は違うが、同様なことはやっている。当局から目を付けられるようなことはない。

それなのに、支配人は取引をした。この店を守るため、店の営業を続けるためだ。何も言えない

。ただ、目の前の黒服の男、いや、目を凝らすと、男は複数いる、男たち、の言うことを聞かないのか。

「では、協力してくれますね」

「はい」としか言いようがなかった。だけど、美里に何が協力できるのだろうか。何の変哲もない、普通の美里に。そのことを黒服たちに述べる。

「普通でいいんです。いや、普通の方がいいんです。普通でないと、相手に気付かれてしまいますから」

相手？相手とは何だ。相手に気付かれるとは何だ。相手を探せということなのか。

「そうです。あなたに、美里さんに、ある人、ある惑星の人を探してもらいたいんです」

美里の顔が緊張する。この黒服の男も、支配人と同じように、人の心が読めるのか。支配人は「人の心は読めません。経験や状況から、人の心を推測しているだけです」と以前、話をしたことがあるが、言葉通りには信じられない。

人の心を交流する仕事の支配人だ。指サックを付けなくても、人の心を読めても不思議ではない。また、美里を始め、何十人ものハートケア士を働かせている以上、人の心を読めなくては管理できないだろう。その支配人が、屈服したか、協力したかはわからないが、言うことを聞く黒服だから、同じ能力を持っていても不思議ではない。

「それでは説明させていただきます」

黒服の男がこう切り出した。

黒服が言うには、今、精神錯乱者が立て続けに発生しているという。しかも、被害者は、美里たちと同じような、心の交流を仕事にしている人たちだという。もう既に、数人が精神錯乱の状態で、病院に入院しているらしい。彼女たちに状況を尋ねても、黙ったままか、大声を上げるかで、意思疎通ができない状況なのだそうだ。

確かに、美里たちの仕事は危険だ。相手の負の感情を一方的に受け取り、吐き出した方は精神が楽になるだろうけれど、受け止める方は精神が破裂しそうになる。だからこそ、部屋を出て、車の中に入ると、傷ついた精神を癒すために、黒い夢を吐き出すために、ヘッドフォンをつけるのだった。

だが、相手の黒い精神、負の精神が強大で、闇が深ければ深いほど、受け止める美里たちの心はそれだけでは対応できない。だから、一週間に一度は、以前、タコ星人の巫女が暴れたときのよ
うに、カプセルの中に入り、全身を浄化させる必要がある。そうしないと、体も心も持たない
のだ。

精神錯乱者が数人も出ているということは、その客は、特別の黒い心を持っているというのか
。でも少し変だ。

「そのとおりです。普通の人ならば、黒い心を一旦排出すれば、なくなるはずで、被害者も一人
で終わるはずなのですが、それが、連続して被害者が出ているのです」

相変わらず、黒服の男は、こちらがしゃべる前に、美里の心を読んでいる。少し、癪なので、
美里は先に口に出した。

「その黒い心を持つ人は、複数人いるのではないですか」

黒服の男は、暗闇の中だが、少しほほ笑んでいるような気がした。それは、美里の行動を読んで
、美里にしゃべらせたのだった。予想通りの質問に、満足しているのかもしれない。

「最初は、そう考えました。だが、被害者の状況を見ると、同じ症状を発しています。違う人と
見るよりは、同一人物と見た方がよいと考えています」

「でも、犯人、いや、まだ、その人が犯人かどうかはわかりませんが、店の方には連絡している
ので、その連絡先を調べれば、相手がすぐにわかるのではないですか」

黒服の男は再び、暗闇の中で笑っているように思えた。美里の幼稚な推理を馬鹿にしている
のか。本当に腹が立つ。

「その点は、私たちも調べました。ただし、連絡先は、常に異なっていました。しかも、連絡先
は使い捨ての、誰でも購入できる携帯電話でした。つまり、犯人は、いや、それは美里さんと同
じですが、犯人と思われる人は、意図的に連絡先を変えているようです」

「そうですか」

美里は、これまでも、変なというか、当たり前というか、お客さんの黒い心を吸収してきた。
それが、美里の仕事だからだが。だが、だが、美里自身が受け止めることができないほどの黒い

心を持ったお客さんがいつ来るかはわからない。精神を錯乱したハートケア士が何人も出ているのならば、美里だって、この仕事から足を洗う、いや、心を洗う時期に来ているのかもしれない。

「それは、この仕事が終わってからにしてください」

黒服が先んじる。この男の前では、何も言えない。いや、何も考えられない。

「それで、私は何をすればいいんですか」

わかっていて、あえて尋ねる。その変な、黒心の人を、星人を探せということだろう。つまり、囧だ。だが、どうやって。相手が自分を指名する確率はものすごく低いではないか。偶然を待つのか。それでは、被害者は増える一方だ。

「もちろん、そうです。相手はこの街に潜んでいます。相手があなたを指名する可能性はわかりません。だから、あなたのような囧は、心配しなくてもあなただけではありません」

私が心配しているのは、私が囧になるということだ。まだ、この囧になることは承諾していない。それに、この犯人を捜すのは、大海原で、それこそ、めだかを掬うようなものではないか。何の保証も、何の確約もない。極めて非効率だ。

「もちろん、我々はこの方法だけで、この犯人、まだ、犯人かどうかはわかりませんが、黒夢、そう、私たちは、その容疑者を黒夢と呼んでいるのですが、を見つけようとしているわけではありません。これまでの、ヘッドフォンから入手した黒夢のデータからも探索しています。おっと、私としたことが少ししゃべりすぎたようですね。とにかく、美里さん、あなたはこれから私たちと共に黒夢の人物を探すことに協力してもらいます」

黒服が一方向的に宣言する。拒絶する権限はないようだ。だが、気にかかる言葉がある。ヘッドフォンから入手した黒夢というくだりだ。美里たちはお客さんと人差し指を通じて、お客さんの悲しみや苦しみなど、負の感情を共有し、相手を癒すとともに、その負の感情を吸収する仕事をしている。もちろん、その負の感情を持ったままでは、それこそ、美里たちが生きていけない。そのために、お客さんが吐き出した負の感情を今度は、ヘッドフォンに対してぶつけるのだった。

そして、美里たちの負の感情を吸収したヘッドフォンは、その情報を全て消し去ってしまっているはずだ。それなのに、そのデータから黒夢を探すということは、消去したはずのデータは残っているということになる。それは、いつから残っているのか。また、その情報を、第三者、つま

り黒服にいつから提供しているのか。情報保護の観点からは可笑しいのではないか。その疑問に対しては、美里が感づいていると知っているはずなのに、都合が悪いと思っているのか、黒服は答えようとしない。

「これからは、これを使って欲しい」

黒服の男が指サックを差し出した。

「それなら持っていますよ」

美里は手提げバッグから指サックを取り出して見せる。

黒服の男は笑いながら

「これは、あなたたちが仕事に使うものとよく似ているけれど少し性能が違います。あなたたちが激しい感情を受け、心が耐えきれなくなる前に、感情の流入を止めることができます。言わば、安全装置が付いているといってもよいかもしれません。そして、その情報は、私たちの元に即座に送られようになっています。このことで、あなたたちをいつでも助けることができます」

「あたしたちを助けることが目的ではなくて、その相手を捕まえることが目的なんでしょう？」

美里は皮肉を込めて、黒服の顔の辺りをじっと見つめ返す。しかし、いくら見つめ返して、黒服の男の顔や体はわからない。返って、輪郭がぼやけていくだけだ。掴みどころがないのだ。これでは、こちらの怒りや非難など、負の感情をぶつけようとしても、黒服にはまともに伝わらずに、拡散、夢散していくだけだ。ひよっとしたら、これが、黒服たちの交渉に当たる安全装置なのかもしれない。

いくら批判しても、美里には断ることができない。それなら、嫌々するよりも、積極的ではないにしても、気持ちよく囿になるしかない。

嫌々感を持ったまま、そのハートケア士の心を壊す、ある意味、心を食べるハートイーターに出会ったならば、いくら隠そうしても知らず知らずの間に顔や態度、行動に出てしまい、囿であることがわかってしまう恐れがある。わかってしまうだけならよいが、逆切れして、命さえも危うくなってしまう。

「その通りです。我々も決してあなたを一人にはしませんし、いざとなったら、飛び込んでいける準備はしています。我々を信用、信頼してください。信頼がないと連携して仕事はできません

」

そう。信頼だ。信頼するしかない。いくら相手が都合の良いことを言っていることがわかっていても、信頼するしかないのだ。あたしたちハートケア士もお客さんとの信頼関係がないと、相手の心をケアすることはできないのだ。

「わかりました」

美里はどちらにせよ受け入れるしかないのだ。支配人と目の前の黒服の間では、既に話がついているのだ。いくら美里が拒んでも、従う様に仕向けられるだろう。こうなれば、逆に、受け入れた方が身を守ることに繋がるはずだ。

もちろん、この申し出を断り、それとともにこの会社をやめれば、危険な目に会うことはないだろう。だが、別の会社で、同じようなハートケア士の仕事をしていれば、黒服が言う「あいつ、黒夢」にいつかは出会うだろう。その時には、支配人も、黒服もいない。それなら、今、この申し出を受け、囮となって、危険なあいつを早く捕まえた方が安全だ。得策だ。

「ありがとう」

黒服から感謝の言葉が漏れた。どうせ、本心では思っではおらず、美里を、単なる囮、咬ませ犬ぐらいにしか思っではいないのだろう。だが、今は、その言葉を額面通りに受け取るしかない。

「できる限り、やらせてもらいます」

黒服が美里を見た。美里も黒服を見た。言葉は交わさない。言葉の裏にある、言葉に出てこない感情を互いに探り合い、読み合う。

「それでは、失礼します」

美里は部屋を出た。まぶしい。さっきまでの部屋の中が暗く、黒服をはっきり見ようと瞳孔が猫の目のように大きく開いていたので、外の光が刺さるように目に飛び込んできたのだ。その光は、美里にとって、明るい未来への誘いなのか、それとも。